

パキスタン(PAKISTAN)のクエッタに着いたのは、イランのバムを出発してから 30 時間ほど経ってからだった。

このクエッタは、パキスタン全土の 44%を締めるパローチスタン州(Baluchistan)の州都である。

因みにこの他に、パンジャブ州(Punjab)、アフガン州(Afghan(北西辺境州))、カシミールエリア(Kashmir)、シンド州(Sind)があり、その頭文字を取って、さらに“l”を加えたのが、PAKISTAN の由来らしい。



パキスタン西部の大都市クエッタ。この街は標高 1600メートルの乾燥した高原に位置する。だから昼でも結構涼しい。

なるほど、“トレビアの泉”的な事をここで知ったのだが、それよりも大事なのが、【パキスタンはイスラムの国である為、酒は禁止されている】という事だった。なんてこった。

パキスタンという国は、インドみたいなもんで、何でもあり、と思っていた。

現実には、ドラッグ類ではメッカみたいなもんだし、マリファナはいろんな所に生えているし、ヘロイン中毒者も多い。

そんな国で、何でビールすら飲めないんだろう。ガンマーGTP もびっくりである。

ただ、イランと違って、大都市の高級ホテルに宿泊する場合には、バーやルームサービスで飲めるらしい。しかし、そんな事を知っても空しいだけである。

さっさと移動する事にした。目指すは北パキスタンのフンザ、通称【風の谷】である。クエッタからは 1000 キロ以上あるので、取りあえず首都イスラマバードへ。

調べると、イスラマバードへは、バスだと 25 時間も掛かるらしい。飛行機だとたった 1 時間だ。4570 ルピー(8161 円)ととても高かったが、酒代で時間を買う事にした。

## パキスタンの概要

- 1.面積：79.6 万 km<sup>2</sup> (日本の約 2 倍)
- 2.人口：1 億 4,872 万人 (2004 年 6 月)(年人口増加率 1.9%)
- 3.首都：イスラマバード
- 4.人種：パンジャブ人、シンド人、パターン人、バルーチ人
- 5.言語：ウルドゥー語 (国語)
- 6.識字率：51.6% (2003 年)
- 7.宗教：イスラム教 (国教)
- 8.略史：1947 年英領インドより独立
  - 1948 年第 1 次印パ戦争
  - 1965 年第 2 次印パ戦争
  - 1971 年第 3 次印パ戦争



## ギルギットへ

タクシーに乗って空港へ。インターナショナルと書いてある。

聞いてみると、イランのザヘダンからクエッタまで週一便のフライトがあって、昨日の午後3時だったらしい。それってズバリじゃないか。

聞いた誰もが『飛行機なんて無い』と言っていたのだが、乗るしかないだろうってフライトがあったとは。丸まる1日損をしたようだ。せっかく週に一度の便だったのに……。

パキスタンの飛行機は遅れる事で有名、と聞いていたが、オンタイムどころか、10分も早く離陸した。英字新聞もあるし、飲み物のサービスもあって快適。

出ない、と思っていた機内食が出た。変なランチボックスに入っていた。ラマダンなので、どうも食べずに持ち運ぶ様に出来ているみたいだ。でも食べている人も大勢いたが。

1億4千万人が住む国の首都の割に、イスラマバード空港はそれほど混んでいない。

パキスタンは、比較的優秀なパイロットを排出していて、優秀な教官を世界各国に派遣するほど、と聞いていたが、自国のフライトは、さほど頻繁にはない様だ。



このイスラマバードからギルギットに行く空のルートもあると聞いていた。空席を調べる為に空港のチケットカウンターに行くと、閉まっている。

どうやら日が沈んだので、ラマダン後のご飯タイムみたいだ。なるほどイスラム国である。

20分ほど待って聞いてみると、街の中心にあるオフィスに行かないと、空席があるか分からないという。コンピューターで繋がっていないとはなんて遅れているんだろう。イランの方がよっぽど進んでいるなあ。

イスラマバード~ギルギット間は雄大な8000メートル級の山々を眺められるというフライトらしい。それだけに天気が安定している今の時期は、常に満席という噂を聞いたので、街の中心まで行って確認するまでもないと諦め、バスでギルギットへ行く事に。

タクシーでバスターミナルに着く。空港と違ってこちらは大混雑。パキスタン名物のギンギラに飾りのついたバスが無数に停まっている。やっとの思いでギルギット行きのバス乗り場に行くと、たった今発車するところで、慌てて乗り込んだ。

もうかれこれ40時間ほど移動していたので、丁度いいバスがなければいけないで、出発は明日と思っていたのだが、こんな時に限ってタイミングが良かったりする。

イスラマバードの郊外を出ると、バスはどんどんと坂道を登って行く。

イスラマバードからギルギットへ行くルートは、カラコルムハイウェイ(通称KKH)と呼ばれ、ギルギットからさらにフンザを経て、中国まで伸びている。

この道路の建設にあたり、何百人ものパキスタン人(と何十人もの中国人)が亡くなっているほどの難所である。時々、土砂崩れがあり通行止めになったり、転落死する事故も起きているらしい。一応アスファルトの道路だが、その道幅は狭く、ガードレールや転落除けの石が無い場所も多い。

おまけにこの日、空が時々光っているなあ、風も強いなあと思っていたら雨が降ってきた。雨は実に3ヶ月ぶりで、何だか嬉しかったが、何もこんな日に降らんでも、と思わなくない。しかも豪雨になった。

私の席は、運転手の真後ろで、ものすごくよく前が見える、と同時にこの道路の怖さもものすごくよく分かる。ギンギラのバスも名物なら、実は運転が荒いのもパキスタンバスの名物なのだった。連続移動で体はとても疲れていたが、前を見ていると何だか全く寝られなくなった。手に汗握るってのはこのことか。

夜の10時頃に食堂で休憩。

15分あるというので食堂で何か食べられないか、厨房に入り込み鍋を見せてもらう。チキンカレーだということで注文する。

絶妙に美味かった。国境で食べたのも美味かったが、これも美味い。イランでは食べられないこの味。もしかしてパキスタンっていい国かも。

腹が膨れたら、何時の間にか寝ていた。寝られないのは腹が減っていただけみたいだ。

## ギルギットの街

ギルギットに到着したのは翌朝の10時。

50数時間の連続移動攻撃はさすがに堪えたが、山あり川あり緑あり、と大自然の風景が癒してくれる。その一方で賑やかな商店街ありで、何だか楽しそうな街だ。

ギルギットの標高は1500メートル。クエッタよりも低いですが空気は澄んでいてなんだかヒヤッとする。きりだった山々は間近に見えて雄大だ。

クエッタでは、東京ほどではないにせよ、人々はせわしく動いていたが、ここでは日だまりでうたた寝をする人、編み物をする人、ゲームに興じる人もいて、ゆっくりとした時が流れている。

青い空には鳥が舞い、目を下に移すと、牛やヤギがのんびりと草をはんでい・・・ない。

何とゴミを漁っているではないか。散らかし放題である。せっかくの山岳風景が台無しじゃないか。

今夜はビーフカレーに決めた。



路上のゴミを食べる牛。誰かが飼っているのだろうけど、そこいらによく歩いている。ヤギもいる。

仕立て屋さんに寄る。

この街には、ミシンを抱えた仕立て屋さんが多い。でもその店員はすべて男性。ものすごい手さばきで注文服を形にしていく。

『縫い物なら何でも任せてよ』というので、穴があいた靴下をミシンでちょっと縫ってもらおうと持参してみた。

ところが、店員は思案して、結局小さな生地をあて、しかも手縫いできちんとやってくれる。洗ってなくてゴメン。



街の洋裁屋さん。スタッフは男性しかいなかった。ちょっとぐらいのほつれならあつという間。

こんな些細な事からも感じるのだが、北パキスタン(通称、北パキ)の人たちって素晴らしい。中東の人たちは、困っている旅人を助けよう、という感じで親切だったが、北パキの人たちは、友人に接するように親切だ。何か前からの知りあいの様な気分になってくる。

商店街では、古着、ショール、絨毯を扱っている店がとても多い。

だいぶ古いが【ガチャ万】という言葉がある。繊維業界の人なら知っているかもしれない。

パキスタンは綿花や羊毛の産地で繊維産業が盛んな国である。

今では、日本にとってパキスタンは“忘れられた国”という感じがするが、以前は繊維関連で日本との結びつきは強かった。日本はパキスタンから繊維原料を輸入し、パキスタンは日本から繊維機械を輸入する。その繊維機械が“ガチャ”と音をたてて動くたびに、大きな利益が生まれることから来たのがこの【ガチャ万】という言葉、と聞いた事がある。

ここには、取り分け古着屋さんが多い。どこからこんなに集めてくるのだろうかというほど、どの店でも山積みになっている。

中には日本の中学校のジャージが混じっていて、“Sasaki”なんて名前が入っていたりする。救援物資か何かの横流しなのかもしれない。

パキスタンは知る人ぞ知る、トレッキング大国である。“トレッキング”の定義を6000メートル以下の徒歩旅行と規定していて、政府が57のトレッキングコースを紹介しているほどだ。そのベースとなる街がギルギットなので、登山用品やダウンジャケットなどもここで多く売られている。



古着屋さん。登山やトレッキングの服装ならこの街で完璧に揃う。一昔前に流行ったジャージやウインドブレーカーも。

目指すフンザはここからさらに1000メートル

ル登り、標高 2500 メートルの高さにある。ヒマラヤ山脈の最西端に近く、風の谷と言われるくらい風も強く、とても寒いらしい。一週間前のイランの灼熱が信じられない。

ここでジャンパーとスウェット、マフラーを買う事にした。古着なので合計 500 ルピー(893 円)である。

そしてランドリーに行き、買ったものを洗ってもらう。ジャンパーがあるにもかかわらず洗濯代は 120 ルピー(214 円)である。

再び暑い地域に戻ったら、ここで買ったものは捨てる積もりで古着を買ったが、もの見事に新品同様になってしまって、何だか捨てられそうもない。

別の古着屋でもオーバーズボンを買う。

そのオヤジと仲良くなって、写真を撮らせてもらおうと、その写真を欲しいという。

当然彼は E メールアドレスなど持っていないので、紙に住所を書いてもらおうとペンを渡したが、オヤジは文字が書けない人のようだった。

パキスタンの識字率はかなり深刻で、50%を切るそうである。女性に至っては 30%になってしまう。つまり 7 割の女性が、満足に小学校へ行っていない事になる。それを知識では知っていても、現実そんな場面に直面して驚いてしまった。

一方で、さっき乗った乗合タクシーで一緒だった青年は、大学院で IT を勉強しているそうだ。ブレンティスホールの英語で書かれた分厚い教科書(要はアメリカ製の値が張る本)で C 言語なんかを勉強している。博士号の授与数が、年間数十人というこの国では、この彼はスーパーエリートに違いない。

街を歩けば、きれいな制服を着た小学生が楽しそうに通学している一方で、ボロをまとい屋台を引いている子供もいる。

パキスタンの人口は日本よりもちょっと多いくらいだが、この国の GDP は、確か日本の 1~2% に過ぎなかったはず。にもかかわらず 3 回もインドと戦争をし、国防費も高いと聞く。

しかし文字を読めるくらいの教育は何とかならないものかと思ってしまった。

## 北パキのご飯

ラマダンでご飯が食べられないのは夕方 5 時半ぐらいまで。

4 時半ぐらいになると、商店街がざわついてくる。

この頃には 5 時半を目指して、いろんな食べ物の調理が開始されるのだ。そこで外国人の私はややフライング気味に食べ歩く。

というか、5 時半近くなると、レストランは満員になって入れないし、屋台は混雑してくるのだ。その頃には我慢していた人たちがすごい勢いで迫るので、外国人の私なんか弾き飛ばされる。

そして 7 時くらいになると、“今日は売り切れ”という店が続出するのだった。ぼやぼやしていると美味しいものにはありつけない。

モモと呼ばれる餃子がある。

少しスパシーな蒸し餃子だ。5個で10ルピー(18円)。お店や屋台によって微妙に味が違うのが楽しい。

ガイドブックなどには、『日本でなら幾らしているかを考えるのはやめよう』なんて事がよく書いてあるが、私は断然“比較しちゃう派”である。だって幸せ~って感じるから。

それにしても、いつも行く日本のラーメン屋の餃子は5個で450円だ。

もしここで450円分のモモを買うと、実に125個、5対5の餃子合コンが開ける量である、ってまた合コンネタだが(と言っても餃子合コンなんてないけど)、街を歩いている人の実に9割は男なんだよな。宗教上、納得、もしくは慣れている人たちはいいかもしれないけど、異教徒様は慣れていない。せめて姿だけでも見たい今日このごろ。アルコール無しでいいから、王様ゲーム無しでいいから、北パキ女性と合コンしたいぞ。



パキスタンの餃子“モモ”。ちょっとスパイスが効いている。それはそれでとても美味しい。一個2ルピー(3.6円)。

女性ネタは続かないので食いものネタ。

焼き鳥屋がある。本格派炭火焼きである(といっても多分この方法が一番安あがりなんだろう)。

1本10ルピー(18円)の小さいやつと、1本25ルピー(45円)のでかいやつ、合計2本を、5ルピー(9円)のチャパティ(パン)に挟んでもらう。

食べてみると、びっくりするぐらいに美味かった。こんな美味しい焼き鳥は食べた事がない。

肉はかなり締まっていて味がある。さらに何かの香辛料が微妙に掛かっていて味を引き立てている上に、微妙な塩加減。絶品だった。

さすがにこの街には、ケンタッキーなどないが、あってもこの店には敵わないはず。品質でも、もちろん値段でも。



焼き鳥屋さん。とんでもなく美味かった。今まで食べた焼き鳥で最高かも。1本、10ルピー(18円)と25ルピー(45円)の2種。

一方、あまり美味くないものもある。米である。インディカ米の細長いやつ。微妙な香りが付いていて、私はちょっと苦手だ。

このギルギットでは、日本人女性が北パキの人と結婚して安宿を開いていて、親子丼や鳥雑炊が食べられる。実はイランでこの情報を得て、ひたすら“親子丼”“親子丼”と唱え続けていたのだが、実際に食べてみると食えたもんじゃなかった。

実はこの日本人女性は現在帰国していて今年一度も来ておらず、現地の人に任せているらしい。そのせいか、日本人なら作らない味に仕上がっている。問題はこの米なのだ。臭いが鼻について

全体が台無し。

この地域でお米は1キロで50円程度らしい。これならモンゴルや中国の値段とほぼ同じ。せっかく国境が近いんだから、違う種類の米を中国から持ってくれば良いと思うのだけど・・・。  
因みに、カレーを食べる時には、この臭いが打ち消され、結構いい味になるから不思議だ。組み合わせというか、相性の問題なのかも。

逆に美味しいのがチャパティと呼ばれるパン。

街にはたくさんのパン屋さんがあって、その店が持っている大きな釜で焼いている。

大家族なのか商店の人なのか、一人で20枚も買って帰る人が多い。5時を過ぎると店の前には行列が出来て、大車輪で焼いている。

この焼きたてが美味しい。

イランで小さくなった私の胃なら、1枚で十分に満足できる大きさのもの。それでいて1枚5ルピー(9円)。パン屋さんでこの値段だが、食堂で食べても5ルピーは変わらない。それほどパキスタンの食事には欠かせないものようだ。



釜の中で焼き上がるチャパティ。アツアツのやつが美味しい。1枚5ルピー(9円)でけっこう大きい。

そうそう、モモと焼き鳥、チャパティの他に忘れちゃいけないのが天ぷら。

ここの天ぷらはイモが多い。日本のサツマイモよりも少し甘みが少ないが、薄切りにしてカラッと揚げたやつはとても美味しい。

またかき揚げ、という少し違うが、何種類かの野菜を混ぜた揚げ物も、見た目の期待を裏切って実に美味しい。

そして、私のお勧めはレバーのサイコロステーキ。道端で、美味そうに肉の固まりを焼いている。食べてみるとレバーだった。でもレバー以外は見当たらないのが不思議である。味は濃厚で、ジューシー。チャパティの上にサイコロを転がしてもらい、レバーをつまんでチャパティをちぎって食べる。これが美味しいのだ。



角切りのレバー(右)とかき揚げの様な揚げ物(左)。拳ぐらいの量で、それぞれ25ルピー(45円)と10ルピー(18円)

イランでのラマダンをとても恐れていたのだが、実際には、あまりの不味さゆえ夕食さえも断食してしまう事もあったので、ラマダンだろうが何だろうが、ほとんど関係なかった。

一方、このパキスタンでラマダン中というのは失敗だ。さすがに夕飯は一度しか食べられない。

つづく